

マンゴー ‘アーウィン’ の収量および果実品質に及ぼす摘果法の影響

○西田 学・東 明弘
(鹿兒島農総セ果樹)

【目的】

マンゴーは生産量の増加から、今後は価格の伸び悩みが懸念され、大玉果生産などによる秀品果率の向上が求められている。摘果は通常、満開約30～60日後に2、3回に分けて行っているが、出荷時に化粧箱に入れる310g以上の果実重に達しない規格外の果実が多い。そこで、大玉果生産および増収を目的として摘果回数と摘果時期を検討した。

【材料および方法】

試験1（摘果回数）：供試樹として、加温ハウス栽培 ‘アーウィン’ 7年生樹を用いた。処理区は、満開約30日後に葉果比80に摘果する1回区、満開約30日後に葉果比40、満開約45日後に葉果比80に摘果する2回区、満開約30日後に葉果比20、満開約45日後に葉果比40、満開約60日後に葉果比80に摘果する3回区の3処理とした。

試験2（摘果時期）：供試樹として、加温ハウス栽培 ‘アーウィン’ 8年生樹を用いた。処理区は、満開約30日後に葉果比80に摘果する30日区、満開約45日後に葉果比80に摘果する45日区、満開

60日後に葉果比80に摘果する60日区の3処理とした。

試験1、2ともに各供試樹の満開日を基準にして摘果を行った。

【結果および考察】

試験1：1回区では、1果平均重が392.9gとなり、収量は3.11t/10aと、2、3回区よりも有意に多くなった（第1表）。果皮色のa値は1回区では他の2処理区よりも有意に高かった。やに果の発生は1回区、2回区で少ない傾向にあった。糖度に差はなかったが、クエン酸は1回区で0.16%と他の2処理区よりも低くなった。

試験2：30日区では、1果平均重が423.2gとなり、収量は2.02t/10aと、45日、60日区よりもやや多くなった（第2表）。また、摘果時期が早いほど果皮色のa値が高く、やに果が少ない傾向にあった。糖度、クエン酸に大きな差はなかった。

以上の結果から、満開約30日後に1回で最終着果数にすることで、収量が10～20%増加すること、果皮色が優れること、やに果の発生が少なくなることが明らかとなった。

第1表 摘果回数が収量および果実品質に及ぼす影響（2004年）

処理区	収量 (kg/樹)	収量 (t/10a)	1果平均重 (g)	果頂部果皮色 (a値)	やに果発生率 (%)	果糖度 (Brix)	クエン酸 (%)
1回区	25.9 ^a	3.11 ^a	392.9 ^a	10.5 ^a	8.9	15.3	0.16 ^a
2回区	21.8 ^b	2.62 ^b	317.6 ^b	2.9 ^b	3.6	15.3	0.20 ^b
3回区	23.7 ^b	2.84 ^b	333.8 ^b	2.0 ^b	15.5	15.4	0.21 ^b

注) 1. 異符号間には tukey法により 5%水準で有意差有り。
2. 収量は120本/10aで換算した（間口6m, 株間2.5m, うね間3m）。

第2表 摘果時期が収量および果実品質に及ぼす影響（2005年）

処理区	収量 (kg/樹)	収量 (t/10a)	1果平均重 (g)	果頂部果皮色 (a値)	やに果発生率 (%)	果糖度 (Brix)	クエン酸 (%)
30日区	16.8	2.02	423.2	5.3	38.6	16.1	0.18
45日区	16.5	1.98	415.4	4.2	40.7	16.0	0.19
60日区	16.2	1.94	406.9	-0.8	70.0	16.5	0.21

注) 1. 異符号間には tukey法により 5%水準で有意差有り。
2. 収量は120本/10aとして換算した（間口6m, 株間2.5m, うね間3m）。